

# 小・中・大連携による図画工作・美術科授業開発コミュニティの実践的研究 —小学校と特別支援学校中学部との実践から—

五十嵐 史帆\*

(平成23年10月4日受付；平成23年11月9日受理)

## 要 旨

現在の学校教育現場は多忙を極め、教員が授業準備や教材研究等にかかる時間を十分に確保することが難しくなっている。また、教員免許更新制等の教員研修の見直しも進められている。一方で、教員育成の場では、実践力が重視されており、教員養成と現職教員の研修における大学の在り方が問われている。これまでも大学と学校教育現場の連携は行われてきたが、これからは、互いに不足している部分を相互に補完するような連携のかたちを考えていく必要がある。

本研究では、大学生（学部生、院生）が教材準備や資料作成等を行うことで授業を支えたり、現職の教員と一緒に授業研究や教材開発を行うなかで教員としての実践力を育んだり、教員同士が情報交換を行ったりすることを目的とした大学生と小・中学校教員による授業協力コミュニティの構築を目指し、その試行的実践として特別支援学校と小学校において授業実践を行った。

今回の実践から、前述した問題を解消する手がかりを得ると共に、子どもたちに多様な学びの場を提供し、大学生が現職教員と子どもたちから具体的に学ぶ機会となるなど、小・中学校教員と大学生にとって互いに有効な場であったことが確認できた。

## KEY WORDS

art education 美術教育, teaching materials development 教材開発

a different school kind 異校種, community コミュニティ, teacher training 教員養成

## 1. 研究の背景と目的

すべての教科指導において、教員には基礎的な知識や技能が必要であることはもちろんであるが、図画工作・美術科においては教科の特性として、造形素材や道具についての豊富な知識や経験が授業を考える上で重要になってくる。しかし、現在の学校現場は多忙を極め、教員が新しい素材を体験したり教材を開発したりする時間を確保することは難しい。また、教科専門ではない教員は授業の準備や教材開発に苦勞したり、指導そのものに苦手意識を持っていたりすることが少なくない。

20年改訂の指導要領では、図画工作・美術科において、領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を〔共通事項〕として整理するとともに、各学校段階の内容の連続性に配慮することなどが示された<sup>1</sup>。総則にも、学校相互間の連携や交流、障害のある幼児児童生徒との交流は配慮事項としてあげられている。このことから、今後、小中学校の教員になるに当たって、取得免許の校種だけでなく、前後の学校種や特別支援学校についての知識が不可欠となってくる。また異校種の教員間の交流も求められることだろう<sup>2</sup>。これらに関して、先進的な実践研究も進められているがそれは一部にすぎず、学校体質の転換や教員の意識改革にまで至っていないというのが現状である<sup>3</sup>。

この問題を踏まえて、これまで、美術科を専門に学ぶ教育学部の学生と、小学校の現職教員と一緒に教材準備や資料作成を行い、授業を行うという実践をしてきた<sup>4</sup>。これに重ねて今回は、特別支援学校中学部の教員と大学院生が共同で行った教材開発の報告と、小学校教員と大学生・大学院生（以下、学生と表記）との共同授業の報告を通して、公立学校と大学との連携における成果と課題を考察し、現職教員の研修の機会と実践力を育む新任教員の育成を目指した双方向的な教員養成のあり方を考える。

## 2. 授業実践

### 2.1 特別支援学校中学部との授業教材開発

上越市内特別支援学校の中学部において、現職教員、大学教員、学生の合同協議のもと、生徒の特性に応じた美術

\*芸術・体育教育学系

科授業「色の学習」の教材開発を行った。授業単元の途中でも、授業の進み具合や生徒の興味、学習状況を確認しながら、数回にわたり検討を重ねた。

### 2.1.1 授業の概要

この特別支援学校での「美術」の授業は、週3回2時間ずつ行われる「生活」の中の「生活単元学習」で実施されている。「実践の方策」の一つとして「個々の課題を考慮しながら主体的に取り組める場面設定と能力に応じた指導方法・形態・教材・教具を工夫する」と示され、教員が担任する生徒の一人一人の実態に合せた教材開発を行っている<sup>5</sup>。

この生徒は、活動内容の変化に過敏であり新しい教材にスムーズに対応できないことがあるため、「同じ内容を何回か繰り返し生徒が慣れていきながら制作できるような教材」、保護者からの希望もあり「中学校美術科に準ずる内容」を提案して欲しいとの学校からの要望があった。これを受けて、大学院の授業「美術科教材開発演習」の受講者が各自で教材案を作成した。授業内でプレゼンをし、皆で検討したものを特別支援学校に提案し、学校と学生の代表が一緒に話し合いを行った。その中で、食塩に色を付け、濃さを調整したり、色を混ぜ合わせたりしながら、色の明度や彩度、三原色を手指の感覚から学ぶ「色の学習」を行うことに決まった<sup>6</sup>。

提案された授業案の中には、導入として「身近にある色を探す」「色を付けた紙を用いたデザイン遊び」といった活動も提案されたが、「自由な選択の中から考えて行動することが難しい」という生徒の実態に合わないということで見送られた。他にも「制作を通して色の性質を理解する」という授業目的は生徒の実態から考えて難しいのではないかとの意見が出された。このようなことから、学生は授業教材を提案するのみにとどまり、細かい流れや時間数などは学校の事情や生徒の実態を熟知している担任教員に任せることとした。

授業では、生徒の学校生活における活動目標「様々な素材や道具を扱う活動を取り入れる」「手指の巧緻性を高める」への考慮や、生徒の混乱を避けるために手順を細かく指示するという理由から、計量スプーンを使って摺り切りで量る手順が加えられた（写真1）。確定した授業の概要は次のとおりである。

授業名 : 特別支援学校中学部「色 いろいろ」

対象 : 中学部1年生（自閉症）

期間 : 平成21年10月～22年2月

主な内容 : チョークで色をつけた食塩を瓶に詰め、色の組み合わせを考えながら作品を制作する。作品制作を通して、「グラデーション」「混色」など色の性質を理解する。

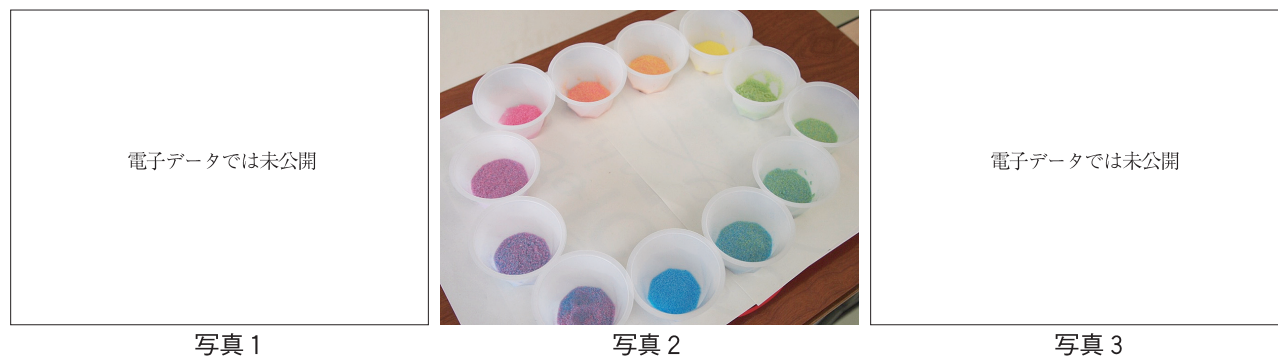


写真1

写真2

写真3

授業当初は、初めての題材で生徒が混乱しないよう、担当教員が手を添えながら一緒に行い、食塩にチョークで色をつける作業を何回か繰り返した後、生徒主体で進めるという流れで行った。授業を進めていく過程で、授業者によって生徒の実態に合わせて授業の進め方、材料・道具の改良が行われた。

当初、この生徒にとって理解するのは難しいと思われていた色の性質についても、生徒の理解が「グラデーション」「混色」と進み、最終的には自ら混色したものを含めた12色を環に並べ「色相環」をつくったり（写真2）、自由に色を組み合わせる作品をつくったりと活動が広がった（写真3）。

### 2.1.2 授業後の検討と課題

特別支援学校での授業が10月～2月までの期間だったことから、検討会は大学の授業期間内に行えなかったため、

受講生が各自で振り返りを行いレポート提出する形に変えた。

このことを含めて今後の課題として、大きく2点があげられる。1つは、学生の授業の観察・参加、合同検討会の時間が確保出来なかったこと、もう1つは、前述のことと深く関係しているが、学生が生徒の障害特性や学校の状況についての理解が未熟であったことである。

観察・参加については、学生の所属が異なっていたことから、皆で一緒に特別支援学校に観察・参加に行くことができなかった。ビデオ録画したものを参観するという事も行ったが、生徒の様子を実際に見た学生とビデオのみの参観の学生とでは、生徒理解に大きな差があり、一緒に教材を考えたり授業を検証したりする際の障害となってしまう。この点について、今後は実施授業の見直しを含めて検討していく。2点目については、先に述べた問題の解決の方策とともに、今後は授業内でのレクチャー等を見直していくことで対応したい。

その他に注目できることとして、授業教材を提案する際に、美術を専門に学んできた学生が、授業目的を考える際に「美術」の技術や領域に固執してしまう一方で、特別支援学校の教員は、目の前の「子ども」の成長に目的を置いていたことがあげられる。この出来事は、「美術」を学ぶのか「美術」を通して学ぶのかという、美術教育の本質にかかわる重要な問題に気が付かせるものであった。このような立場の違いから生じるズレによってメタ認知をしていることもこの授業の重要な目的である。今後は、実践後の合同検討会を充実させることでこのような目的が果たせるよう改善していく。

## 2.2 公立小学校における授業実践

上越市内公立小学校において、大学生が授業教材を提案し授業を行った。21年度は「造形遊び」の授業、22年度は「造形遊び」と「鑑賞」の授業を提案し、担任教員の助言と支援のもと実践を行った。授業時にはビデオ撮影を行い、その記録をもとに分析と検討会を実施し、学校現場において有益かつ現実的な教材となるよう協議した。

### 2.2.1 授業提案～実践～検討会までの流れ

3つの授業提案から実践までの大まかな流れは、ほぼ共通して以下の通りである。

大学3年生と大学院1年生が合同で行う、「実践セミナーⅠ「美術」」と「実践場面分析演習Ⅱ「美術」」の授業において、学部生と大学院生がほぼ同じ割合になるように2つのグループに分け、それぞれで数回話し合いを行って授業案を作成した。22年度の「鑑賞」の授業については、別の授業で行った授業教材案をたたき台にして話し合いを始めた。その後、小学校の担当教員に授業案を確認してもらい、受講生全員で模擬授業を行った(写真4, 5)。実践授業の直前には、代表者が学校を訪ねて児童の様子を参観したり、担任教員と授業についての詳細な打ち合わせを行ったりした。



写真4



写真5



写真6

授業を提案したグループが中心となり授業実践を行い、もう一方のグループは2人1組になりビデオカメラで特定の児童やその周囲を撮影した(写真6)。他に、教室全体の動画と写真で記録を残した。

授業後は、撮影した児童の行動の一部を、相互行為分析の手法<sup>7</sup>を参考に記述し、ビデオや写真とともに検討会の材料とした。

### 2.2.2 実践授業の概要

実践した授業の概要は以下の通りである。

#### (1) 21年度実践 中学年(造形遊び)

授業名 : 「雲の王国をつくろう」



対象 : 小学3年生1, 2組 (53名)

日時 : 平成22年1月13日 (水) 5, 6限

主要内容: 自然素材の緩衝材「エコフォーム」を主材料とした活動。青いビニールシートで覆った空間を空に、白いエコフォームを雲に見立てて、「雲の王国をつくろう」という声掛けから活動をはじめた。導入部では、体を使って素材を楽しむ様子が見られた(写真7)次第に個別の活動に変わっていった(写真8)。時折、友達と材料を身体に掛け合ったりして遊んでいる様子も見られた(写真9)



写真7



写真8



写真9

(2) 22年度実践 中学年 (造形遊び)

授業名 : 「くものお家」

対象 : 小学4年生 (55人)

日時 : 平成22年2月2日 (水) 5, 6限

主要内容: 毛糸, ビニールテープ (スズランテープ), 紙テープ, トイレットペーパー等を使い, 周囲のネットにからませたり, 材料同士を絡ませたりしながら空間をつくっていく活動(写真10, 11)。まとめとして活動の最後に, 皆で作った空間をゆっくり見て回り, 代表の児童に感想を発表してもらった(写真12)。



写真10



写真11



写真12

(3) 22年度実践 高学年 (鑑賞)

授業名 : 「からだで感じる北斎」

対象 : 小学6年生1組 (25人) 2組 (24人)

日時 : 平成22年11月14日 (水) 5, 6限

主要内容: 葛飾北斎「富嶽三十六景」のうちの一つ「駿州江尻」<sup>8</sup>の中に描かれている人物を一人隠したものを「対話型鑑賞」<sup>9</sup>の方法を援用して鑑賞する。クラス全体で, 隠れた人物の姿を予想する(写真13)。次にグループに分かれ, 用意した大型扇風機で実際に風を浴びながらポーズをとり, 考えたポーズをデジタルカメラで撮影する(写真14)。各グループで撮影されたものを絵と照らし合わせて確認しながら, 作品をもう一度鑑賞する。最後にクラス全員で北斎の描いた人と同じポーズをする(写真15)。北斎のデフォルメされた人物表現を体で感じとることを目的としている。



写真13



写真14



写真15

### 2.2.3 授業後の検討会

(1)と(3)の授業後の検討会での話題の一部を例にあげて述べる。

授業(1)の検討会は、大学内で学生のみで行った。検討会では、授業を撮影した学生が、各自で撮影ビデオをもとに児童の活動の一部分を記述し、児童がどのような活動をしていたのか自己の分析を書き加えたものを資料とし、全体からは見え難い子どもたち一人一人の授業内での活動の様子について話し合った。話題の一例をあげる。

ある児童(Aくん)は材料から何かをつくる活動を熱心に行っていたが、周囲の児童が「遊んでいる」様子に惹かれ、Aくんも遊びはじめ、その後はつくったり、遊んだりを繰り返していた。この様子から、Aくんは活動に「飽きてしまったのではないか」との指摘があり、「児童が飽きないように活動時間の設定や教材の見直しが必要である」との意見が出された。これに対し「エコフォームを掛け合ったり戯れ始めたりすること＝活動に飽きた、集中が途切れた、とは一概には言えない。これこそ体全体を使って素材を感じているのではないか」との意見も出された。

このことについては、検討会で意見をまとめることはなかったが、多くの時間を割いてそれぞれの意見をぶつけて話し合った。以下に検討会後の学生レポートの一部を引用する。

Aくんは最初集中して作り、友達と遊び始め、また作りまた遊ぶという流れだった。このことを大学の授業で発表した際、「作ることと遊ぶことを分けて考えているのですか?」のような質問をされた。(中略)自分の中でもうまくまとまっていなくて、自信を持っては言えない。しかし作ることと遊ぶことは繋がっている部分はあると思うけれど、やはりこの2点は別のものである。

私たちが作品を制作する際に過去の経験であったり、なにかのきっかけがない限り制作には入ることはできない。そこから造形遊びの中の遊びの部分は制作するための経験やきっかけにつながると考える。今回の造形遊びの実践から子どもたちが得られたことが次の活動でどのような発展や学びへと結びついていくのか知りたいと思う。

Aくんが見せる表情には、作品を制作するときもエコフォームを体全体を使って楽しんでいるときも同じような心から楽しいと思える顔をしていた<sup>10</sup>。

レポートからは、「遊び」≠「学び」なのか<sup>11</sup>という、造形遊びの意義を問うことへとつながる大変重要なことを、学生たち自らで気が付き、実際に目にした子どもたちの姿と結びつけながら、自分なりに考える良い機会となっていたことがうかがえた。



写真16



写真17

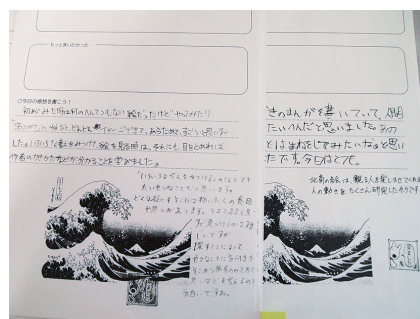


写真18



授業(3)の検討会は、小学校で授業後に担任教員を交えたもの(写真16)と大学内で分析資料をつくり学生だけのものと2回行った。

小学校での検討会での意見として、担任の先生から「対話型鑑賞」に慣れていない子どもたちに「何か気が付いたことはありますか?」という抽象的な発問は答え難い。「対話型鑑賞」から入ったのでは、人物描写に注目させることは難しい。」との助言をいただいた。子どもたちの発達段階やクラスの雰囲気を知っている担任教員としての貴重な意見をいただいた。また、北斎の人物描写に注目させるということが目的ではあったが、「浮世絵版画を鑑賞するのであれば、社会の授業で勉強している歌川広重「東海道五十三次」のほうが、親近感が持てたのではないか。」等、図画工作科だけでなく、学校の教育課程全体を視野に入れた教材開発の重要性に気が付かされる意見をいただいた。

検討会には参加できなかった別の担任教員からは、後日メールをいただいた。以下に引用する。

今日の活動のねらいは①と②は活動の様子から評価すると達成できたように感じました。③については、課題が残ったような気がします。(中略)

北斎が描いた自分物のポーズを代表の男児にやらせてもらいましたが、あそこで、もう少し他の子どもたちから、「もっと手がくっついているよ」「足はもっと開いているよ」「おしりはもっと突き出しているよ」などと注文が出てくると、「表現するのは無理だよ」という声から代表から出てきたらと感じました。(中略)

最後に、授業者のまとめの言葉に、「デフォルメにより動きが伝わりやすくなる」という説明があり、子どもたちはここでようやくデフォルメの効果に気付いたような気がしました<sup>12</sup>。

授業案に記述された評価の観点(①～③で記述)に対応させ、実際に評価する立場からの指摘や具体的な声掛けの例などは、ベテラン教員ならではの助言であった。授業を組み立てるだけで精一杯の学生たちにとって、評価についても考えさせる貴重な指摘であった。

2回目の検討会では、1回目の検討会やメールの内容を踏まえた話し合いとなり、授業方法と教材が適切であったかということが話の中心となった。

原画を一部デジタル加工し人物を隠した画像(写真17)を鑑賞する場面で、「隠された人物のポーズを風景や周囲に描かれているものから予想する」というねらいに対し、「対話型鑑賞」を利用した導入が適切であったか。」との意見が出された。このことについては、「対話型鑑賞」に対する理解度により学生の意見が分かれた。意見交換を通して「対話型鑑賞」の意義と、今回の授業の目的についての問い直しが行われた。

他に参観していた現職の教員から意見として「極寒の時期に、扇風機を使って授業することが適切だろうか(健康上の問題、子どもたちが感情移入できるか否か)。」等も紹介し、授業教材の開発において、季節感や安全面においても考慮すべきであることを再確認した。

授業後のワークシートには、以下のような児童の感想が寄せられた。

絵は見方によっていろいろ違ってくるんだなと思いました。それに実際に絵のポーズをやってみると意外にむずかしいんだなと思いました。

絵の人のポーズではかんたんそうにみえたけどじっさいにやるとむずかしいと思いました。

初めてみた時は何のへんてつもない絵だったけどやってみたり、「探してみて」といわれると、どんどんイメージできて、あらためて、すごいと思いました。いろいろな考えをみつけて、絵を見る時は、それにも、めをとめれば、作者のかきかたなどが分かることを学びました<sup>13</sup>。

このワークシートの内容や授業時の子どもたちの様子、参観者の意見も含めて、「実際に風を浴びたり笠を持って考えたり、描かれたポーズをみんなで真似てみることで、不自然な(デフォルメされた)北斎の人物表現のおもしろさに少しは気が付かせることができた」との見解で検討会をまとめた。

検討会後に授業者が中心となって、すべてのワークシートに以下のようなコメントを書いて子どもたちに返却した(写真18)。

北斎の作品は長野県の<sup>おぶせ</sup>小布施「北斎館」という美術館でみることができます。この美術館では、北斎の絵の版画

ではなく、北斎本人が描いた「肉筆画」を見ることができます。

北斎の絵は、見る人を楽しませてくれますね。人の動きをたくさん研究したそうですよ。

皆が違うことを考えるから面白くなるのだと思います。絵を見る時には「正解を出す」なんてことは考えてはいけません。自分なりに考えることが楽しくなるポイントだと思います。

絵の中の人のポーズは足がつかれましたね。今度絵を見るときに絵の中の人と同じポーズをとってみてください。そのとき、絵の中の人になりきって何を考えているのか考えているもの新しい発見があると思います<sup>14</sup>。

コメントからは、学生が授業を行うにあたって、授業内で取り扱う作品だけでなく様々な作品について調べていたことが読み取れる。実際に子どもたちを前に授業するという責任感が、模擬授業では得られない緊張感を生み出し、より深い教材研究を促していたと考えられる。他にも、授業後の検討会での振り返りをもとに、授業では伝えきれなかったことをワークシートで伝えようとしていることも読み取れた。コメントは学生が自主的に書き込んだもので、そこには、授業を振り返り授業改善していく主体的な学びの姿勢とともに、子どもたちの考えや言葉に触れ、授業を受け入れてくれた子どもたち（学校）への感謝の気持ちが表れていた。

授業については多くの課題を確認しつつも、自分たちで行った授業について振り返り、肯定的に認めることは、教員を目指すうえで重要なことであり、授業においてもこのような機会を大切にしておく必要があるだろう。

### 3. 研究成果

#### 3.1 特別支援学校中学部との合同授業開発

この実践は、「障害にみられる特徴」に対応する一般的な教材を提案するというものではなく、実在する「1人の生徒」に対する具体的な支援を考えるというものである。そのために、立場や専門性を異にする者が集まり、対象の生徒に合わせた授業をつくるという形で進めていった。

「同じ内容を繰り返して行うことで生徒が自主的に進められる教材」との要望、「内容の変化に過敏であり、新しい教材にスムーズに対応できない」細かな生徒の状況、「様々な素材や道具を扱う」「手指の巧緻性を高める」等日常生活や生徒の将来を見据えた学校教育課程全般にわたる目標といった、特別支援学校特有の制約があったが、その中で美術科の教科目標をどのように設定するかを話し合い、「色彩などの表し方を身に付ける」「意図に応じて材料や用具の生かし方を考える」という生徒に合わせた対象となった生徒独自の授業目標を設定した。

実践の成果としては、ひとつは、学生が生徒の実態に合わせて柔軟に授業方法や材料を改善する場を目にすることが出来たことにある。特別支援教育ならではのきめ細かな授業の進め方や教材や道具の選び方は、作品主義に陥ってしまいがちな図画工作・美術科においても一度、教科を通して教えるということがどのようなことなのか、学習支援や教材開発はどうあるべきなのか再考する貴重な機会となった。もうひとつは、美術科を専門としない現職教員にとって、教材についての話し合いの場が美術科の専門的な知識を得たり、教材を開発の視点を得たりする研修の機会となっていたことである。授業者の教科内容への理解が深まったことにより、初めに提案された題材からさらに発展した内容へと授業が展開されたことからこのことが言えるだろう。この2つの点から、教員養成としてはもちろん、教員研修としても少なからず有効であったといえる。

#### 3.2 公立小学校における授業実践

この実践からは大きく3点の成果が得られたと考えている。1点目は、造形遊びについての実際の子どもの活動から学生が学ぶことが出来たということである。検討会での話し合いにみられるように、子どもの姿から自らで答えを導くという経験は、教育に携わる者としてはもちろんのこと、自己の表現活動を振り返るうえでも有効であることが学生レポートから読み取れた<sup>15</sup>。

2点目は、学生と現職教員の交流が学生にとってはもちろん現職教員にとっても有効であったことが、授業後に頂いた感想から読み取れた<sup>16</sup>。しかし、今回の在り方が十分であったとは言い難く、今後はより充実した交流の在り方を模索していく必要がある。

3点目としては、子どもたちに多様な学びの機会を提供することが可能であることを実践で明らかにできたことである。造形遊びの授業について、「時間的な制約・スペースの問題・経費の問題・片付けの問題などから思い切った

取り組みをすることがなかなかできない<sup>17)</sup>との声が学校現場から聞かれることが多い。今回の実践では、普段の学校生活では実現することが難しい、材料の確保や授業準備に時間を要する活動に取り組んだ。鑑賞の授業では、学生の専門性を生かしデジタル機器を用いた授業であったが、未熟ではありながらも、デジタル教材の可能性を提案するものになった。人数の多さや、時間や資材や資料が多分にある大学という環境を生かし、現職教員では、物理的、時間的にも困難な活動を子どもたちに提供できたことにも大きな意味があったといえる。

#### 4. 今後の課題

これまでの実践から見えてきた具体的な課題として2点あげる。ひとつは、合同で検討する時間の確保である。現職教員が多忙であることはもちろんだが学生の時間を確保することが予想以上に難しく、学校訪問や打ち合わせに出たか否かということが、授業や検討会での参加姿勢に強く影響していた。本実践後のレポートや感想から考察するならば、学生と現職教員が互いの特性を生かした研修とするには、授業実践そのものよりも、授業や実際の子どもの様子を中心に話し合う場において新たな視点や考え方を獲得し多くのことを学んでいた。このことから、今後はより検討会を充実し、教員と学生、異校種間の教員同士、学校と大学の交流の在り方を検討していく必要があるだろう。

もうひとつは、コミュニティを形成する際の情報公開と交流の再検討である。当初webでの公開を予定していたが、児童生徒の写真を掲載することについては様々な問題や危険があるため公開は行わなかった。報告書等への使用写真の確認についても、教員の方々に多くの時間と手間を割いてもらうこととなってしまった。このことについても再検討が必要である<sup>18)</sup>。

これらの成果と課題をもとに、今後も学校現場と大学の連携のより有効なあり方を検討していく。

#### 注及び引用・参考文献

- 1) 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』(第1章総説2 図画工作科改訂の趣旨) 参照。
- 2) 『小学校学習指導要領』(第1章総則第4の2) 参照。
- 3) 『小学校学習指導要領の解説と展開 図画工作編』教育出版、藤江充他編、2008 『新教育課程の用語解説』学校図書株式、財団法人学校教育研究所編、2009参照。
- 4) 「公立小学校との連携による授業開発についての一考察—造形芸術系コースの学生による図画工作科授業の提案と実践—」学校教育実践学研究, 広島大学大学院教育学研究科, 2009, 他。
- 5) 特別支援学校「平成21年度授業計画」
- 6) 他にも生徒の得意なことを生かして「エクセルに数字を繰り返し打ち込んで絵を描く教材」等が提案された。
- 7) 分析の際には、『造形遊びの相互行為分析』せせらぎ出版、北澤晃、2007を参考文献として取り上げ、現象学的アプローチを紹介し、簡略化したものを作成させた。
- 8) 『北斎美術館第2巻風景画』集英社、永田 生慈 監修、1990より「駿州江尻」の図版を使用した。
- 9) 対話型鑑賞については、次の文献を参考にした。(『モナリザは怒っている!?鑑賞する子どものまなざし』淡交社、上野行一・奥村高明、2008、『なぜこれがアートなの?』、淡交社、1998、アメリカ・アレナス著、福のり子訳)
- 10) 授業レポートより抜粋。
- 11) 造形遊びについて、学校において「遊び」が学習として成立するののかという問いは常になされている。造形遊びを構想した一人といえる西野範夫は、フロイトの「子どもは自分の遊びにまじめに取り組まないと考えるのはまちがいであろう」やフィンクスの「遊びの行為的な性格は、自発的、能動的であり、生き生きとした衝動に支えられている」等の言葉を援用しながら「造形遊びは、いわゆる〈遊び〉が持つ自由さや柔軟さなどの〈遊び性〉に着目したのである。」と述べている。(「子どもたちがつくる学校と教育」『美育文化vol 47』、1997. 2 参照。)
- 12) 実践授業後に、担任教員からいただいたメールより抜粋。(原文)
- 13) 授業ワークシートの感想欄より抜粋。(原文)
- 14) 授業ワークシートに書き込まれた学生コメントより抜粋。(原文)
- 15) 学生レポートより抜粋。(原文)「造形遊びと聞いて、毎回納得のいかないひっかかるころがあった(中略)私自身が内向的な子どもであったためかもしれない。今回の実践でもエコフォームに飛び込まないでいた子どもがいたが、その子は一人で黙々と作り続けていた。授業が終わる際に大事そうにできたものを抱えて持って帰りたいと言ってきた。今の私自身が作品をつくることと似ていた。今までは造形遊びと聞くと体全体を使って動く大きな行為の過程に意味があると思っていたが、(中略)見た目が大きな行為につながる行為の過程にも意味はあると感じた。」「技術中心主義的な視点を持っていた私にとって、それを学ぶことが最優先事項と捉えていた。(中略)その観点から「造形遊び」について否定的にとらえることとなっていた(中略)しかし、研究授業を観察して、「造形遊び」の意味するものをかいま見ることが出



来たように感じている。」

- 16) 学生レポートより一部抜粋。(原文)「担任の先生との打ち合わせができたことにより、児童の実態が少し見え、危険なこと・予防すべきことがわかった。」「活動に小学校の先生が入って手の止まっている子にきっかけを与えてくれたり、ほめたりしてしてくれたので、何とか場を持たせることが出来ました。」担任教員からいただいたメールから一部抜粋。(原文)「子どもたちの表現の豊かさに驚きました。同時に、豊かな表現をひきだした学生の方々の実践の素晴らしさにも驚きました」授業を参観した現職教員からの感想レポートより一部抜粋。(原文)「鑑賞の授業では、教科書の作品、友達の作品をもとにそのよさや作者の思いを読み取ることが多かった私です。今日の授業は大変勉強になりました。」
- 17) 現職教員授業レポートより抜粋。
- 18) 本論文に掲載している小学校・特別支援学校内の写真については、担任教員及び学校長に許可を得た。なお電子データについては一部の写真のみの公開とする。

# A practical study of community for art classes development to cooperate with elementary school and junior high school and university

—Through the practice of an elementary school and special-needs education school junior high school—

Shiho IKARASHI\*

## ABSTRACT

Elementary schools and junior high schools are very busy at present and it is difficult for teaching staff to make time for lesson preparation and to research course materials. Amidst a review of teacher training, the role of universities in teacher development and in-service teacher training is being questioned. Although there has been co-operation between universities and elementary/junior high schools until now, it is necessary to think of concrete ways of co-operation such as a mutually complementary relationship between universities and elementary/junior high schools in the future.

This study aims to build a co-operative class community. University students (undergraduate and graduate students) will assist in class work by carrying out the preparation/creation of course materials, etc, on behalf of in-service teachers which will give them an opportunity to learn practically about guidance suited to the situation of the children and to learn from the wealth of experience of the in-service teachers.

Through this practice, we will explore a new way of teacher training where teacher development and in-service teacher training is carried out interactively.

---

\* Music, Fine Arts, and Physical Education